

I 地域の姿

【道央地域】

(石狩・空知・胆振・日高・上川・留萌)

比較的温暖な夏期の気候を利用して稲作の中核地帯を形成。

その他、野菜、軽種馬、肉用牛など、地域の特色を生かした農業も展開。

一部の項目は、農業の特色により以下の3地域に細分。

- ①稲作地域(空知・上川・留萌)
- ②稲作、野菜等地域(石狩・胆振)
- ③軽種馬地域(日高)

【道南地域】

(後志・渡島・檜山)

水稲が各地で栽培されているほか、野菜作や果樹作、酪農などが盛ん。

道内では最も温暖な気候に恵まれ、集約的な農業が展開されている。

【道東(酪農)・道北地域】

(宗谷・釧路・根室)

気候が冷涼で、泥炭地などの特殊土壌が多いため牧草地が中心で、これを活かした大規模な酪農経営が行われている。

【道東(畑作)地域】

(オホーツク・十勝)

大規模な畑作経営により、麦類、豆類、てんさい、ばれいしょ、たまねぎなどの生産が盛ん。
また、大規模な酪農経営も行われている。



I 地域の姿

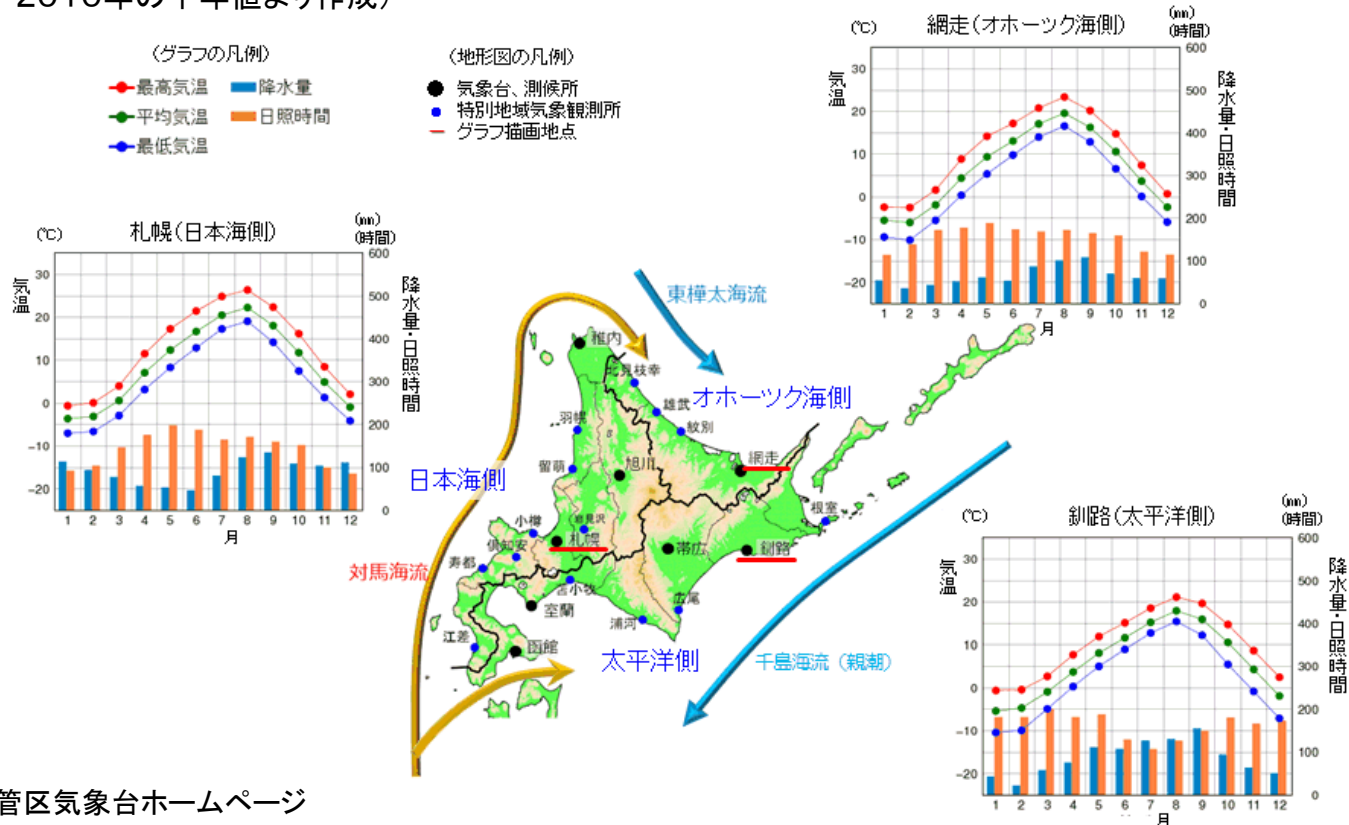
1 気候の特性

— 地域によって大きく異なる気候特性 —

○ 太平洋、日本海、オホーツク海と特性の異なる3つの海と、大雪山系、日高山脈などの地形により、地域によって大きく異なる気候特性。(図)

- ① 太平洋側: 冬は晴れの日が多く、日照時間も多い。夏には海岸部で霧の日が多く、日照時間が少ない。
- ② 日本海側: 冬は寒気の影響を受け曇りや雪の日が多い。夏は比較的温暖な気候。
- ③ オホーツク側: 冷涼な気候で、降水量が少ない。

図 各地域を代表する3地点の気候グラフと地形図
(1981～2010年の平年値より作成)



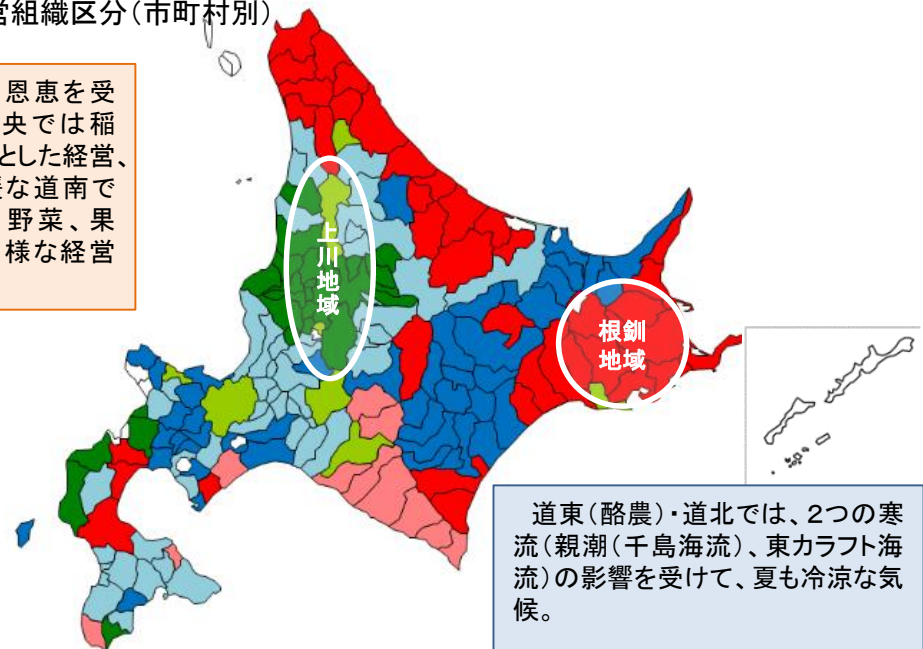
【ワンポイント解説】

－ 海流の影響を受けた特徴ある地域農業 －

- 道央や道南では、暖流の恩恵を利用して水稻、野菜、果樹などの多様な農作物を栽培。これに対して、道東（酪農）・道北では、寒流の影響を受けるため農作物が育ちにくい地域が多く、酪農が中心。（図1、2）
- 根釧地域よりも緯度が高い上川地域で、水稻のような亜熱帯原産の作物が栽培できるのは、海流が大きく影響していると思慮。

図1 主な農業経営組織区分(市町村別)

暖流の恩恵を受けて、道央では稲作を中心とした経営、最も温暖な道南では稲作、野菜、果樹など多様な経営が展開。



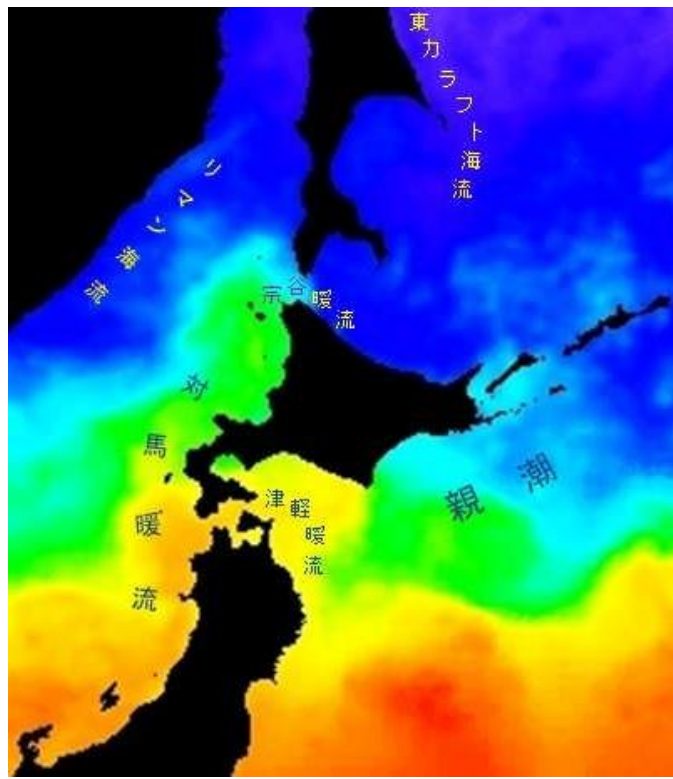
道東(酪農)・道北では、2つの寒流(親潮(千島海流)、東カラフト海流)の影響を受けて、夏も冷涼な気候。

特に、釧路地域の夏は、大量の湿気を含んだ南東の季節風が親潮(千島海流)によって冷やされるため、濃霧(海霧)が発生しやすく、日照時間が少なく気温も低いいため、牧草以外の栽培が困難。

- 主な農業経営組織区分
- 経営体なし(秘匿含)
 - 稲作
 - 稲作以外の農作物
 - 酪農
 - 酪農以外の畜産
 - 複合経営(稲作主位の経営体10戸以上)
 - 複合経営(稲作主位の経営体10戸未満)

市町村別に、単一・複合経営に着目しながら、最も経営体数が多い経営組織部門で色分けした。なお、複合経営については、稲作部門が主位の経営体数が10戸以上又は10戸未満により色分けした。

図2 北海道周辺の海流



出典:札幌管区気象台ホームページ
 (http://www.jma-net.go.jp/sapporo/tenki/kikou/kikohenka/0.3_tirikankyo.pdf)

I 地域の姿

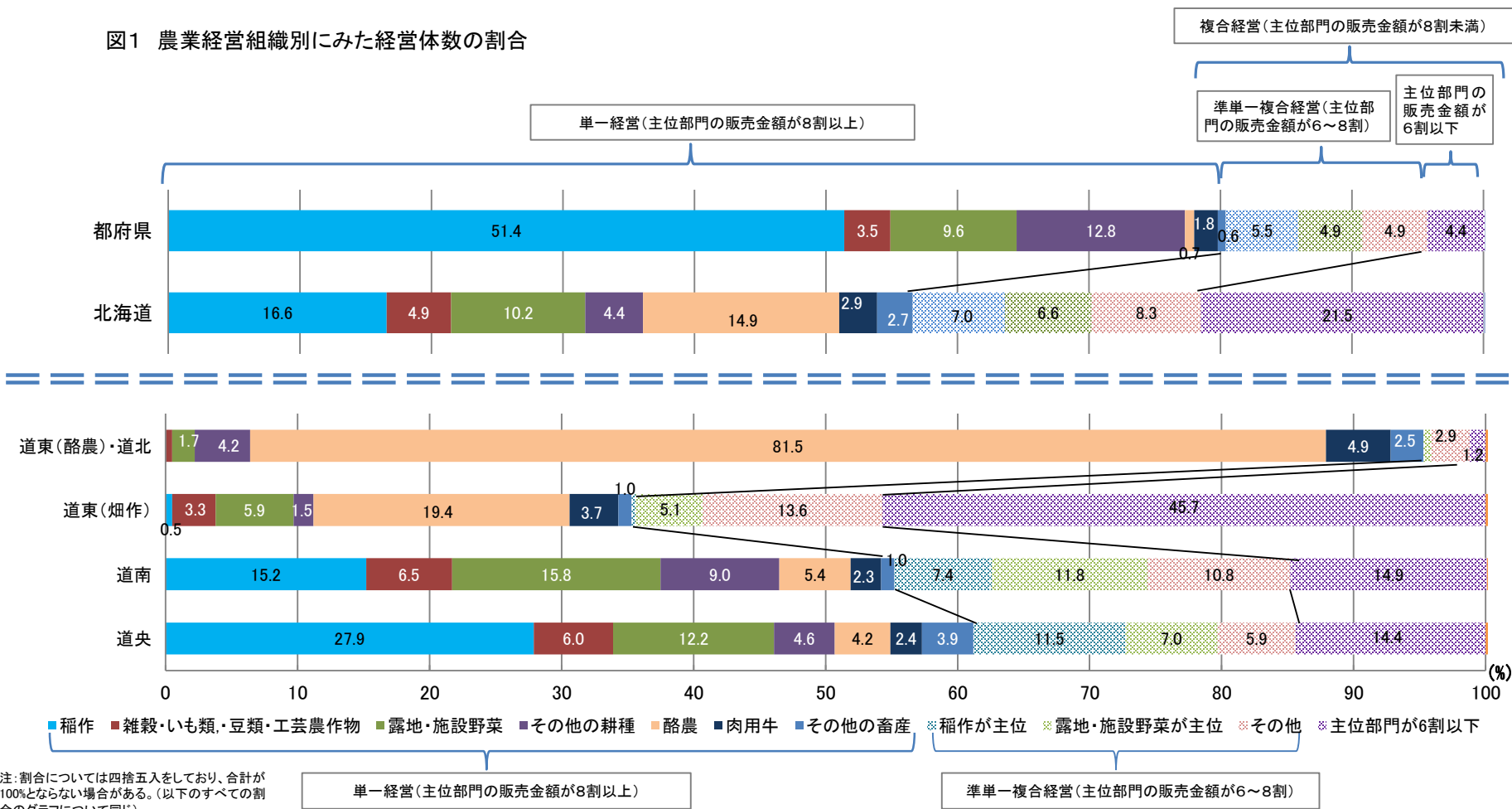
2 農業経営組織別の農業経営体数割合

— 都府県に比べて複合経営の割合が高い —

○ 北海道は複合経営の割合が高い。(北海道43.4%、都府県19.7%)

- ・道東(酪農)・道北：酪農単一経営の割合が高い。
- ・道東(畑作)：複合経営の割合が高く、特に主位部門の販売金額が6割以下の経営体の割合が高い。
- ・道南：稲作、雑穀・いも類・豆類・工芸農作物、野菜等の単一経営の割合が高い。
- ・道央：稲作単一経営の割合が高く、準単一複合経営で稲作部門主位を合わせると、稲作主位の経営体の割合が約4割。(図1)

図1 農業経営組織別にみた経営体数の割合



さらに、道央地域を細分してみると、稲作地域は稲作(単一経営+準複合稲作主位)で約5割、稲作・野菜等地域は複合経営が約5割、軽種馬地域は、その他の畜産(軽種馬)が約4割。(図2)

図2 道央地域の農業経営組織別にみた経営体数の割合

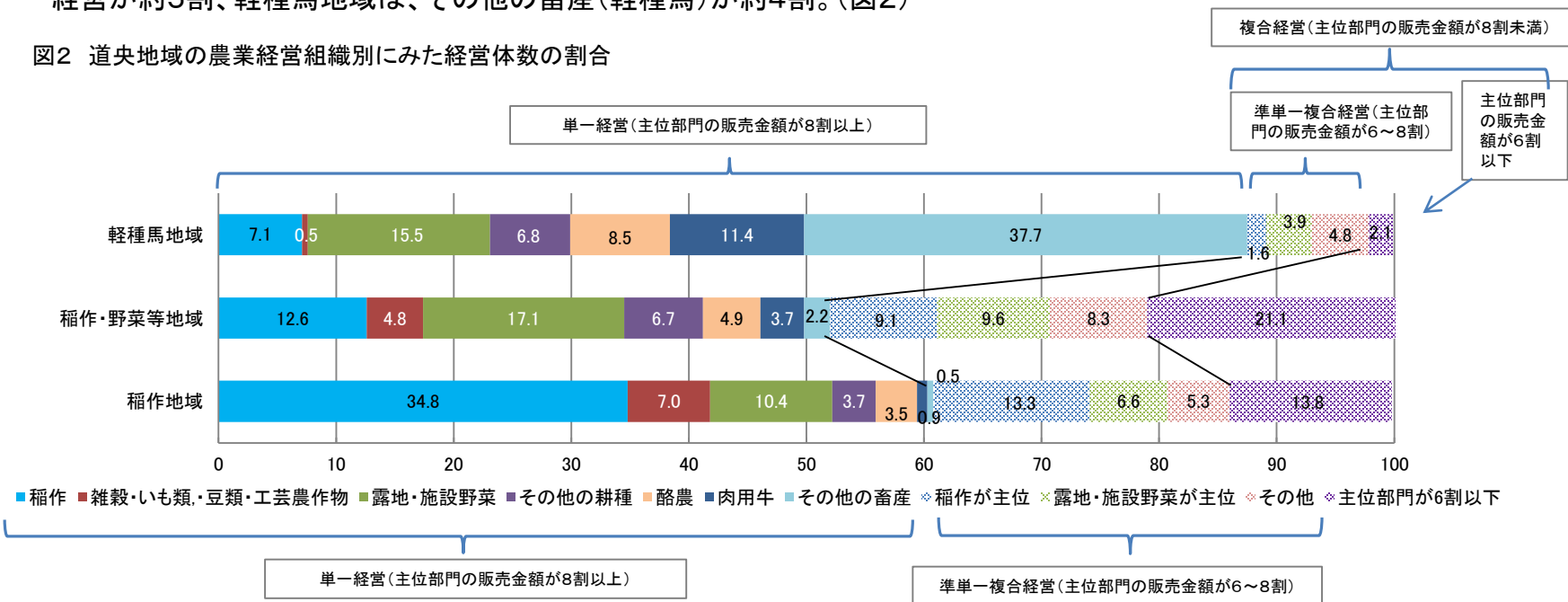


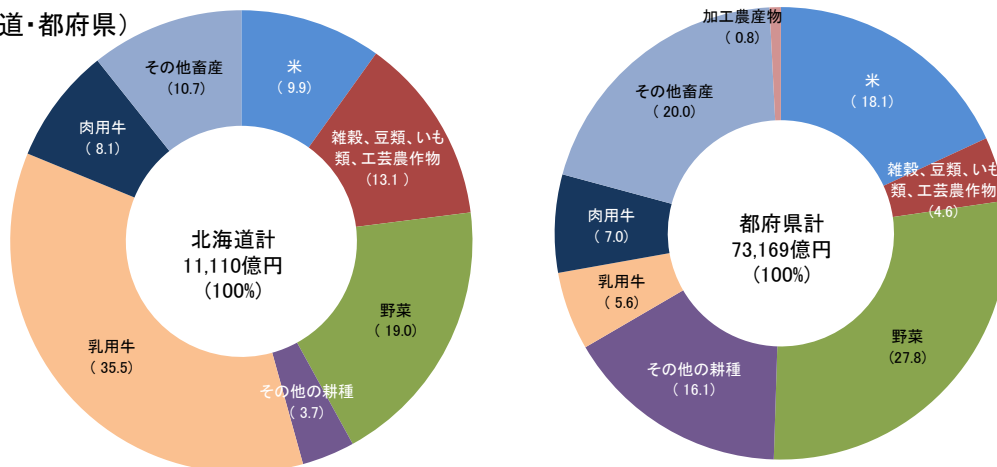
図3 部門別農業産出額割合(北海道・都府県)

(参考)

北海道の部門別農業産出額の割合を都府県と比べると、畜産の割合が高く(北海道54.3%、都府県32.6%)、特に、乳用牛の割合が35.5%と高い。(図3)

※農業産出額

農産物の生産量及び価格に関する諸統計を用いて推計。具体的には、品目ごとの生産数量に品目ごとの農家庭先販売価格(消費税を含む。)を乗じて求めたもの。



資料: 農林水産省「生産農業所得統計(平成26年)」

【ワンポイント解説】

— 新たな市町村別農業産出額(推計)でみる地域別農業産出額の特徴 —

今般、農林水産省は、農林業センサス結果等を活用した新たな市町村別農業産出額(推計)を公表。
その結果を用いて地域別の農業産出額の構成比を求め、さらに特化係数を用いて特徴をみる。

地域別の部門別農業産出額構成比 単位：%

	米	雑穀、豆類 いも類、工芸農作物	野菜	その他の 耕種	乳用牛	肉用牛	豚・鶏	その他 畜産
道央	25.8	6.0	25.2	4.8	11.5	5.7	10.0	6.8
道南	12.7	12.3	33.7	5.6	14.3	7.2	7.4	0.0
道東(畑作)	0.2	24.6	18.9	3.1	36.5	11.3	3.5	0.4
道東(酪農) 道北	0.0	0.7	1.4	0.4	89.1	6.0	0.2	0.2
北海道計	10.0	13.0	19.1	3.4	35.6	8.1	5.5	2.6

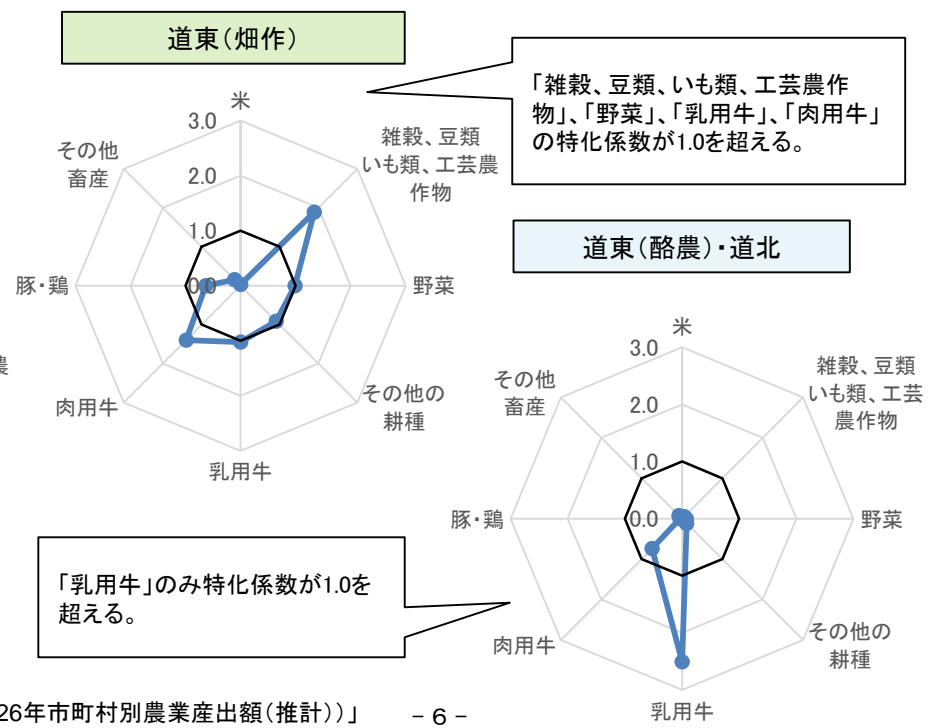
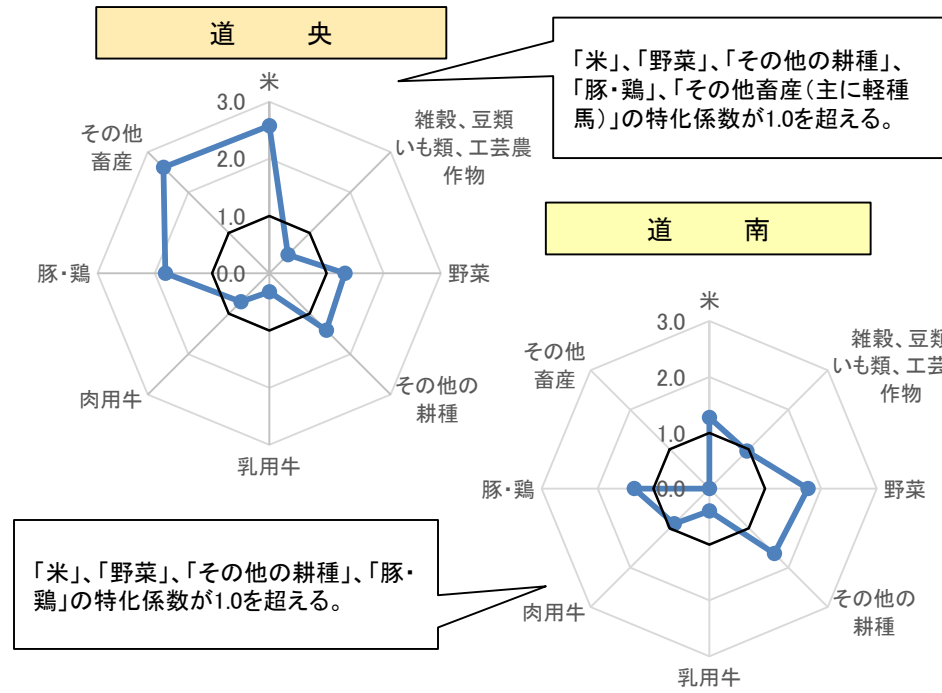
地域別の部門別農業産出額の特化係数(北海道計=1.0)

	米	雑穀、豆類 いも類、工芸農作物	野菜	その他の 耕種	乳用牛	肉用牛	豚・鶏	その他 畜産
道央	2.6	0.5	1.3	1.4	0.3	0.7	1.8	2.6
道南	1.3	0.9	1.8	1.6	0.4	0.9	1.3	0.0
道東(畑作)	0.0	1.9	1.0	0.9	1.0	1.4	0.6	0.2
道東(酪農) 道北	0.0	0.1	0.1	0.1	2.5	0.7	0.0	0.1



※市町村別の按分に用いた統計数値が秘匿されている場合は、該当する市町村の部門の数値を秘匿したため、構成比の合計が100とならない。

※ 特化係数
地域の部門別産出額がどれだけ特化しているかをみる係数。1.0を超えるほど特化しているといえる。ここでは、「地域のi部門の割合 / 北海道のi部門の割合」で算出した。



I 地域の姿

3 農業経営体

— 道央、道南地域の減少率は2桁台 —

- 北海道の農業経営体数は、道央が52.1%と過半。道東(畑作)と合わせると、全体の8割弱。(図1)
- また、2005年以降5年ごとの農業経営体数は、北海道の各地域とも都府県と同じように減少傾向。特に、水稲作が中心の道央、道南地域の減少率は2桁台。(図2及び次ページ図1)
- 道東(酪農)・道北以外は2010年から2015年の減少が緩やかに。(図2)

図1 地域別の農業経営体数の割合

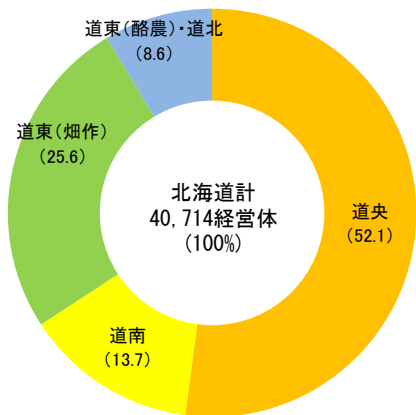
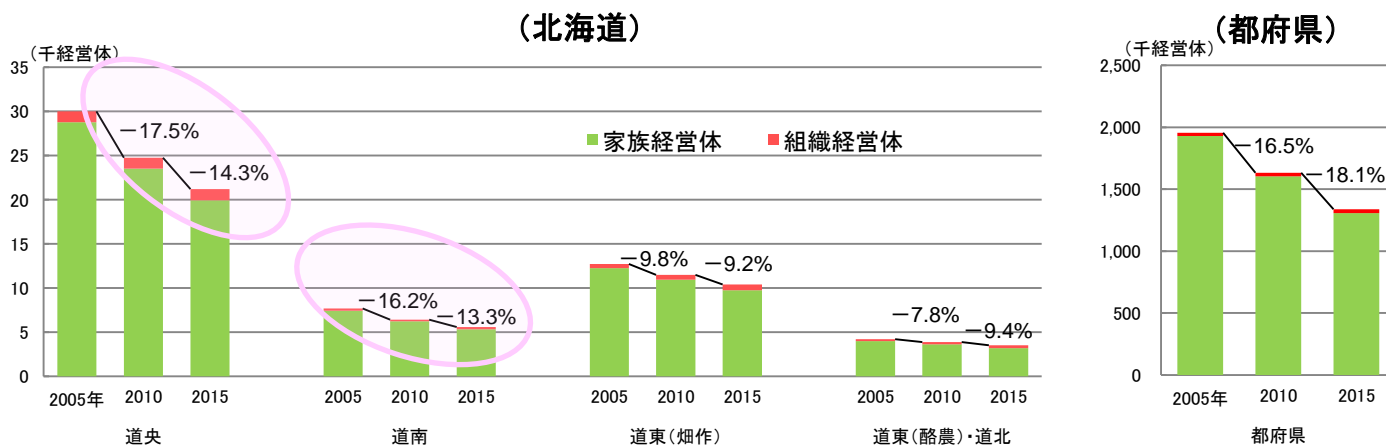


図2 農業経営体数の推移



さらに、道央地域を細分してみると、

- 稲作地域が7割、稲作・野菜等地域が2割と、この2地域で9割以上を占める。(図3)
- 2005年以降5年ごとの農業経営体数は、特に、水稲を主に作付けしている地域の減少率が高い。(図4)

図3 道央地域の農業経営体数の割合

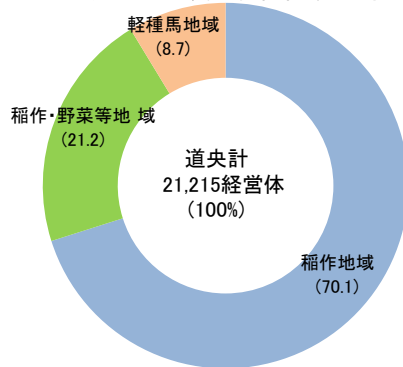
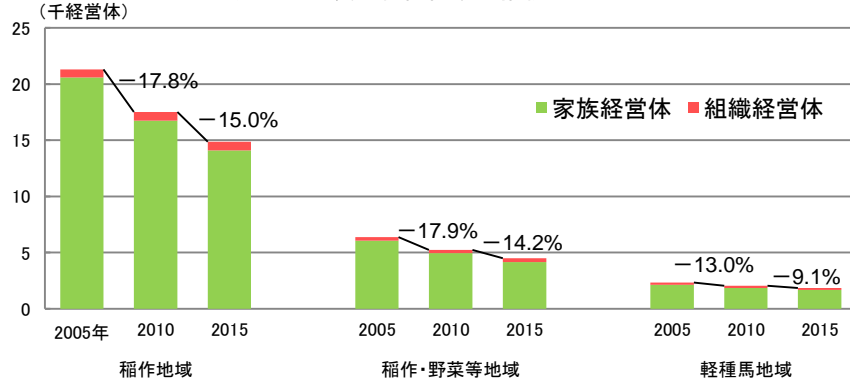


図4 道央地域の農業経営体数の推移



【ワンポイント解説】

— 稲作(稲作単一経営・稲作主位の複合経営)や複合経営の経営体の減少が大きい —

農業経営組織別の農業経営体数の2005年から2015年の増減をみると、

- 北海道は稲作経営(稲作単一経営及び稲作が主位の準単一複合経営)及び複合経営の減少数が大きい。減少率をみると稲作が主位の準単一複合経営が最大。(図1)
- 都府県は稲作単一経営の減少数が際立って大きく、減少率は酪農単一経営が最大。(図2)

図1 農業経営組織別の農業経営体数の2005年から2015年の増減【北海道】

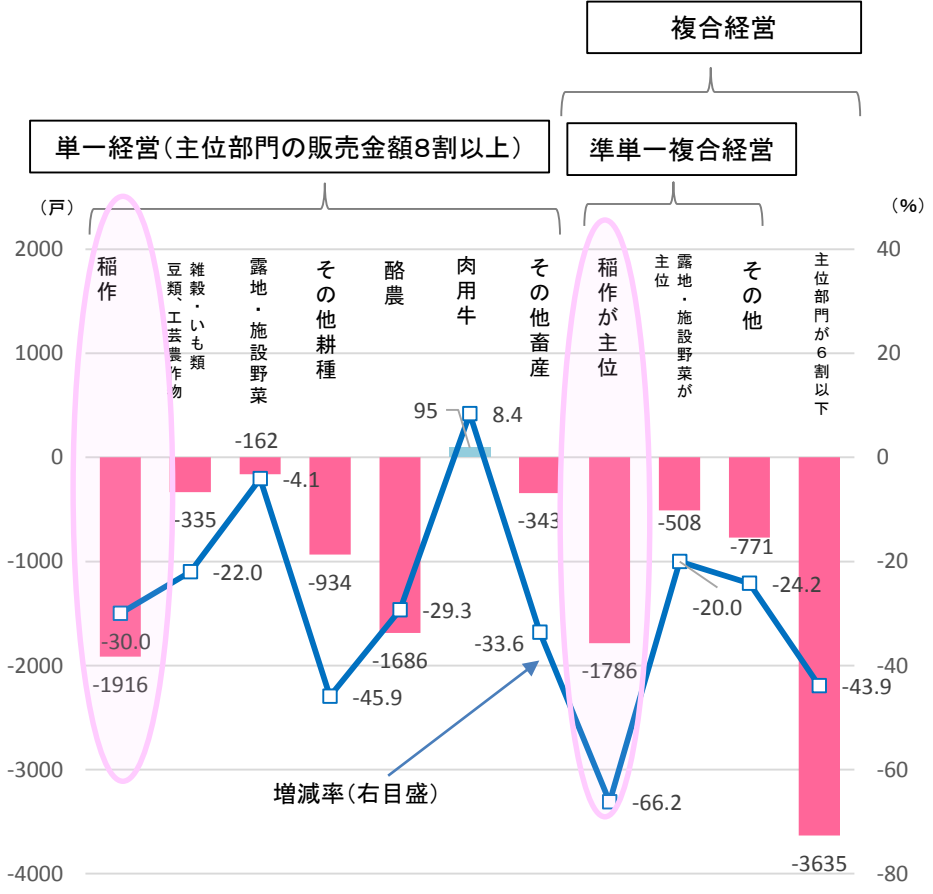
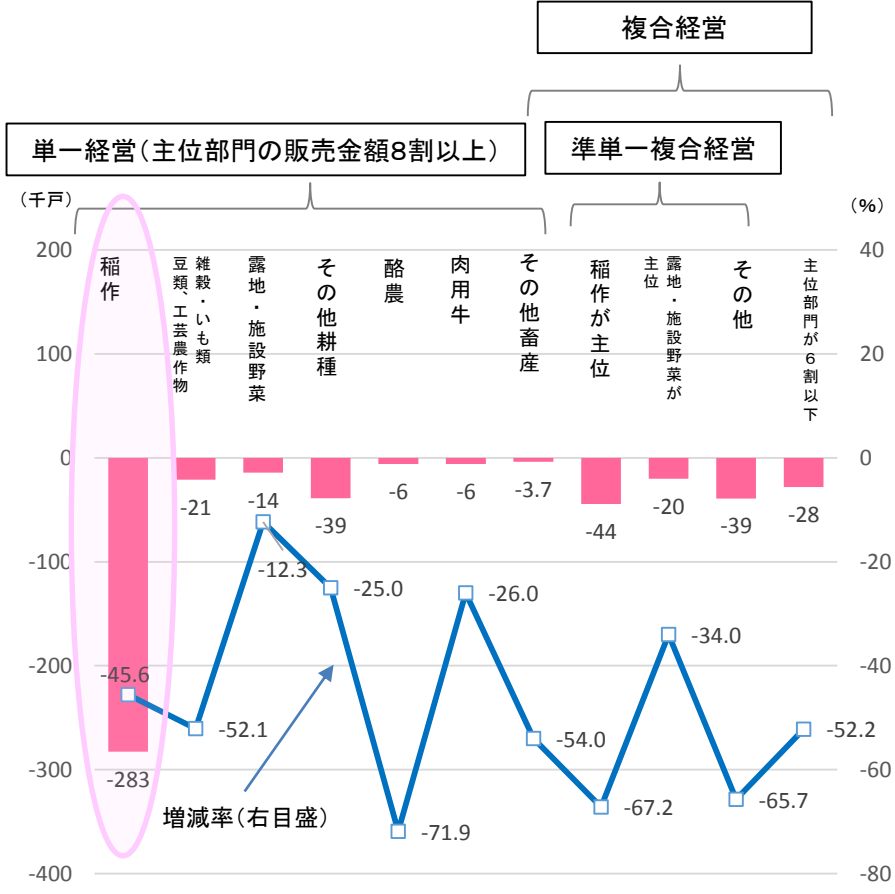


図2 農業経営組織別の農業経営体数の2005年から2015年の増減【都府県】



I 地域の姿

4 農業経営体のうち法人経営体

— 各地域で法人経営体が増加 —

- 法人経営体数は、道央が50%と最も高く、次いで道東(畑作)の順。この2地域で全体の約8割。(図1)
- また、2005年以降5年ごとの経営体数は、都府県と同様、北海道の各地域とも増加の傾向。特に、道南及び道東(酪農)において、2010年～2015年の増加率が大きい。(図2)
- なお、都府県では「農事組合法人」の構成割合が比較的高いが、北海道の各地域では少なく、大部分を「会社」が占める。(図2、3)

図1 地域別の法人経営体数の割合

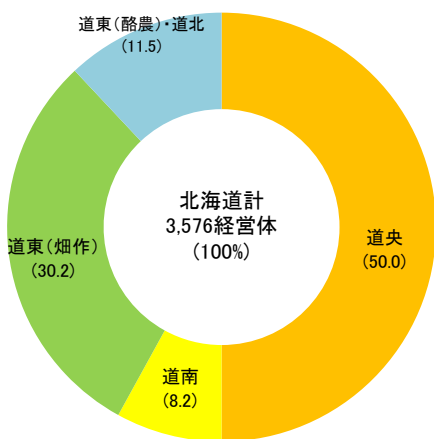


図2 法人の種類別経営体数の推移

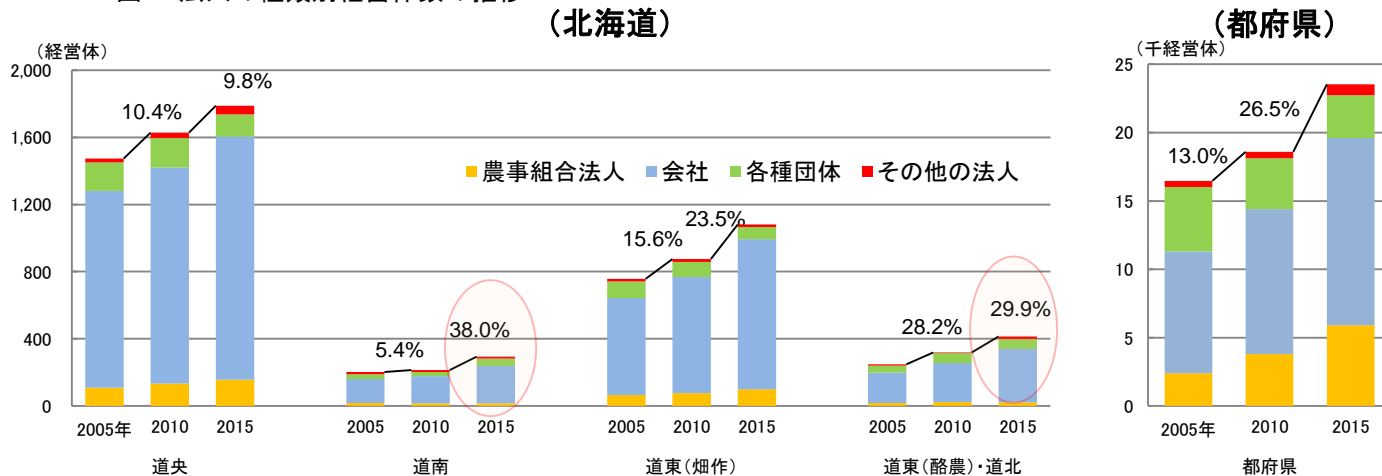
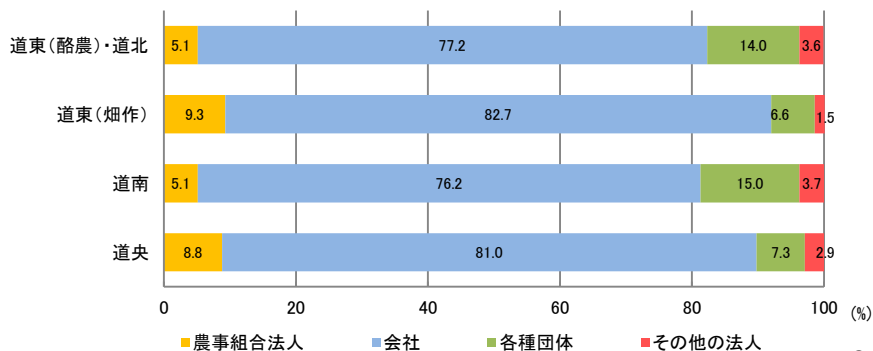
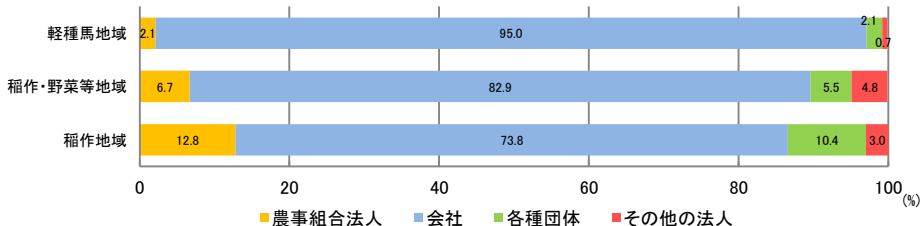


図3 地域別の法人の種類別経営体数の割合



道央地域を細分してみると、稲作地域で「農事組合法人」及びJA等の「各種団体」の割合は比較的高いが、軽種馬地域では大部分が「会社」となっている。(図4)

図4 道央地域の法人の種類別経営体数の割合



I 地域の姿

5 経営耕地面積

— 1経営体当たりの経営耕地面積は、道東(酪農)・道北で75ha、道南では12ha —

- 経営耕地面積の地域別割合は、道東(畑作)が最も高く、次いで道央の順。この2地域で約7割。(図1)
- 稲作が多い道央は「田」が、畑作が多い道東(畑作)は「畑(牧草以外)」が、さらに酪農が多い道東(酪農)・道北は「牧草専用地」の面積が多い。(図2)
- 酪農地帯(道東(酪農)・道北)の1経営体当たり経営耕地面積は、小規模稲作地帯(道南)の約6.5倍で、大部分が所有地。(図3)

図1 地域別の経営耕地の割合

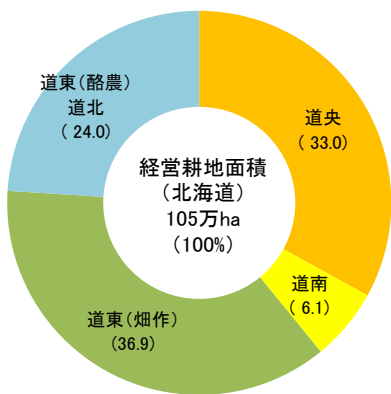
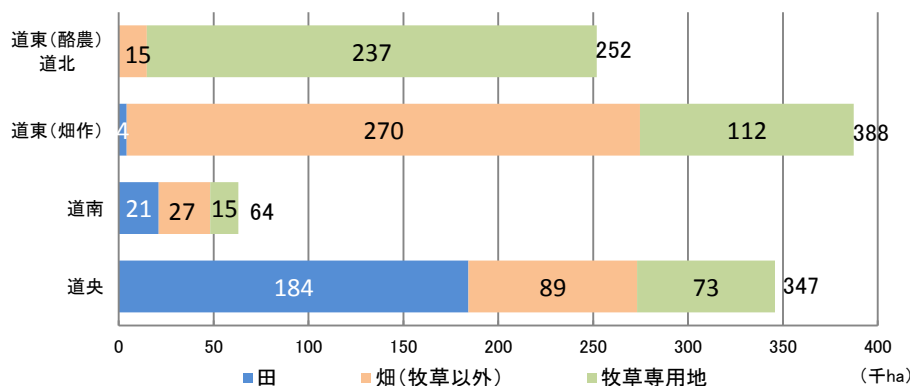
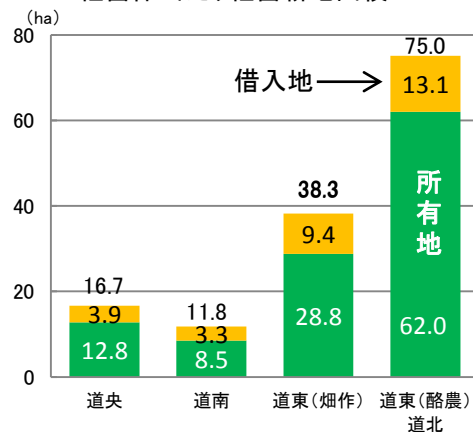


図2 地域別の耕地種類別経営耕地面積



注: 単位未満を四捨五入しており、合計と内訳が合わない場合がある。(以下のグラフについて同じ)

図3 地域別の経営耕地のある農業経営体の1経営体当たり経営耕地面積



さらに、道央地域を細分してみると、

・ 稲作地域の経営耕地面積は、軽種馬地域の約7倍、水稲・野菜等地域の約4倍で、その中心は「田」。(図4)

・ また、道央地域の1経営体当たりの経営耕地面積は都府県の約9倍。(図5)

図4 道央地域の耕地種類別経営耕地面積

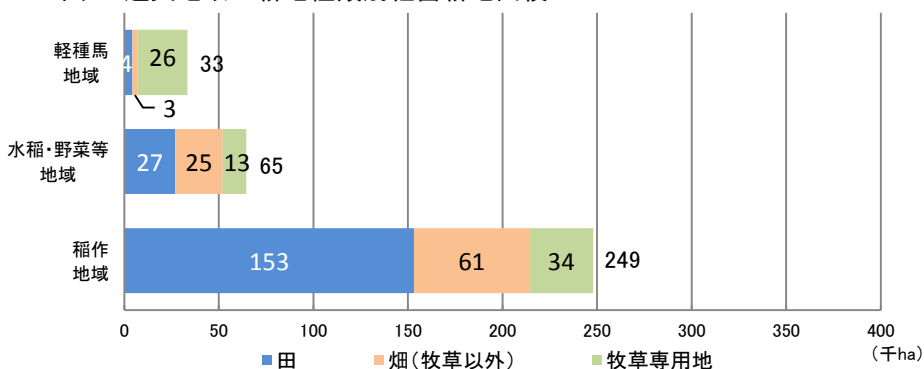
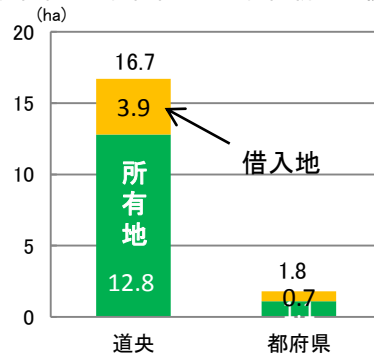


図5 道央地域と都府県の経営耕地のある農業経営体の1経営体当たり経営耕地面積



I 地域の姿

6 飼養頭数(乳用牛、肉用牛)

— 1経営体当たり飼養頭数は、乳用牛、肉用牛ともに道東(畑作)地域が最も多い —

○ 乳用牛の飼養頭数は、道東(酪農)・道北と道東(畑作)が30万頭以上。肉用牛の飼養頭数は、道東(畑作)が最も多い。1経営体当たりの飼養頭数はどちらも道東(畑作)が最も多い。(図1)

○ 北海道の1経営体当たり飼養頭数は、都府県に比べ乳用牛が約2倍、肉用牛が約4倍と大規模。(図2)

図1 地域別の乳用牛・肉用牛の飼養頭数、1経営体当たり飼養頭数

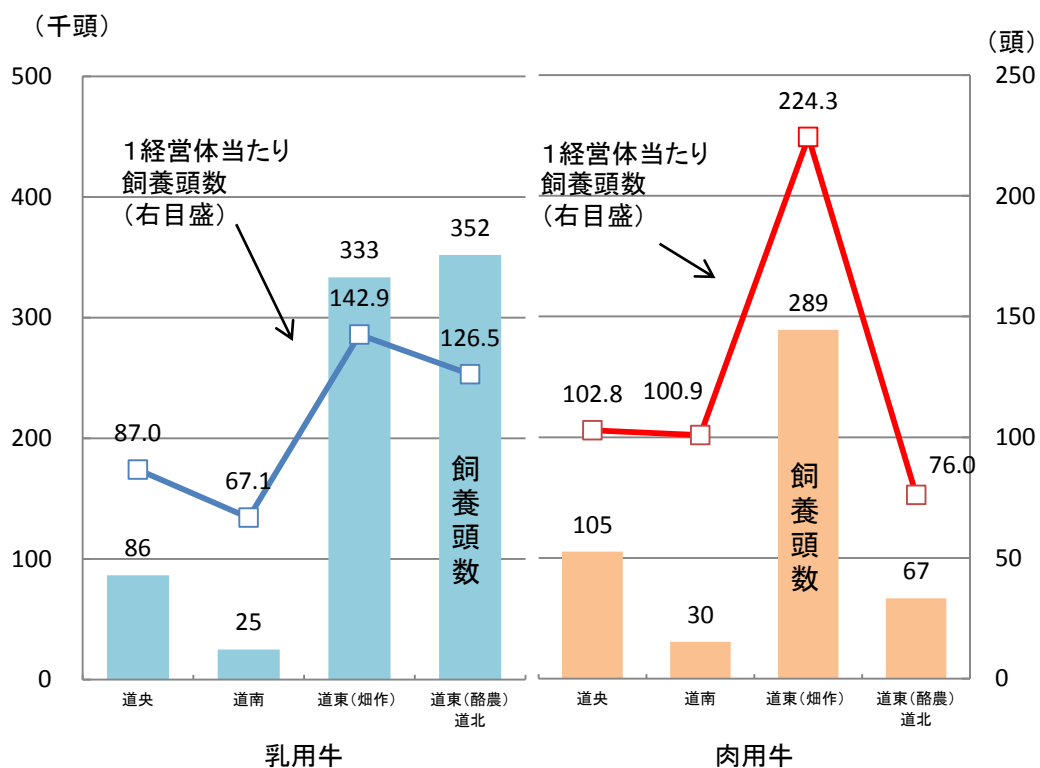


図2 北海道、都府県別の乳用牛・肉用牛の飼養頭数、1経営体当たり飼養頭数

